

食べ物の記憶

小嶋祥三

わたしは食べ物にあまりこだわりがない。好き嫌いはあったが、年齢によって変わってきた。今はマア何でも食べる。美味しい、不味いという感覚はある。ただし、平均的な味ならば、要するに、美味しくも不味くもなければ、それで満足してしまう。外で食べた場合、不味ければその店は避けるが、特に美味しいと思ってもそれを追求しようという気はあまり強くない。その場限りのことが多いのだ。もう一度味わおうと思って記憶にある店に行ってみると、店はなくなっていたりしてがっかりする。そんな時は、自分の舌を疑ったりする（流行っていいはずだが...）。子供のころから、自分の感覚は他の人の感覚は違うみたいだと思うことがあったので、仕方ないとあきらめてしまう。また、営業していても、以前の味の記憶を再現できないことが多い。店の味が変わったというよりは、食べた時のこちらの条件が違うのだらうと思ったりする。ある人が、午前中は昼に何を食べるか考えている、というのを聞いてびっくりした。また、別の人が「無性に〇〇を食べたくなる」というのを聞いて、そんなこともあるのかと思った（わたしにもごく稀に且つわずかにそういう気持ちになることがあるが、行動が伴うことはまずない）。わたしは昼休みになってから、さて何を食べようかと思う。そして、面倒だな、コンビニでサンドイッチとおにぎり（それも圧倒的にコンブ）でも買うか、ということになる。そういえば、行列に並んでまで何かを食べようとは思わない。そんな人間の、これは美味しい！（その逆もある）と思ったことを含む、食べ物の記憶についての文章である。

母親の乳の出が悪かったようで、私はヤギの乳で育ったらしい。もらえると思っていたヤギの乳が棚の上に置かれてしまい、わたしはバタッと倒れて足をばたつかせたということだ。疎開先で食べ物が不足していたのだろうか、サツマイモ（多分）で作ったお菓子？のようなものを私は欲しがったそうだ（「ウシのウンチみたいの、くれよ」）。これは美味しい！という最初の鮮明な記憶は紅茶とトーストである。疎開先から東京に戻ってきて、幼稚園の友達の家遊びに行ったとき出された。紅茶には砂糖が入っていて甘く、パンにはバターがぬってあったように思う。戦後まもなくで、世の中全体が貧しかった（そういえば、何かの折に母が弁当を作ってくれたが、アミのつくだ煮がご飯を覆っていた。おかずはそれだけだった。無論、麦飯も食べた）。甘いものはご馳走だったし（お汁粉を思い出す）、バターがぬったパンはまだ一般的でなかった。そんなわけで美味さにびっくりしたのだ。田舎から出てきた父は上野精養軒で初めてカレーライスを食べさせてもらい、こんな美味しいものが世の中にあるのかと思ったそう。同じような経験だ。

小学校の給食も美味しいと思ったものがあるだろうが、記憶はあいまいである。評判が悪い脱脂粉乳のミルクは嫌いではなかったし、コッペパンも喜んで食べた。時折出た砂糖

をまぶした揚げパン、カレー、鯨カツもご馳走だった。アルマイト？の皿とコップを給食袋に入れて持っていったのを思い出す。給食は当時の子供たちの栄養補給や健康の維持に重要な役割を果たしたと思うが、その記憶としてこんなものしか浮かばないのはどういうことだろう。そういえば、小学校の運動会や遠足の弁当に母親はよくお稲荷さんを作ってくれた。これは美味しかった。ネットでお稲荷さんの検索をして、美味しいと言われている店で買ってみた。残念ながら、特にどうということもなかった。最近のものは油揚げの味付けが甘過ぎるように思う。父親が稀にオランダのエダムチーズを持ってきた（どうやって手に入れたのは知らない）。表面が赤く、丸っこい、硬いチーズだった。これは美味しかった。最近、このチーズを買ってみたが、美味しかったものの意外と塩気が強いのは驚いた。塩気で思い出した。梅干しを竹の皮に包んでしゃぶった記憶がある。

中学生の頃は身体が発達する時期で、大きくなりたい一心で、ただただ分厚い弁当箱でガツガツと食べていたような気がする。これと言って美味しいものの記憶がない。そういえば、級友がくれたイワシのツミレが美味しかったのを覚えている。おかずの交換（こちらからは卵焼きを提供した）などあまりやらなかったから覚えているのか。おかずについては、カボチャ、ソラマメ、ジャガイモ、サツマイモなど、これぞ澱粉といった感じのものはあまりうれしくなかった。高校時代に信州の戸隠に行ったが、そこで食べたイワナの塩焼きが美味しかったのが記憶に残っている。大学や大学院時代は生協の食堂や学校周辺の店で食べていた。特に美味しいものを食べたという記憶はない。わたしは研究や実験にのめり込むと、食べるのが面倒になる傾向があった。仙台の親戚の家で、お昼に冷やし中華の出前をとってくれた。その冷やし中華を美味しいと内心思った。美味しい、不味いを口にする習慣がないのだ。一緒にいた親戚の大学生が「おばさん、この冷やし中華、美味しい！」というのを聞き、自分も人並みの味覚を持っているのだと思った。

苦手の方の話も一つ、二つ。子供の頃、カキが苦手だった（今は別に問題ない）。お使いで肉屋さんに行った。肉屋ではコロケなどを揚げていたが、カキのフライも扱っていた。肉屋のお兄さんは、お使いエライね！といった感じで揚げたてのカキフライを手ののせてくれた。食べないのは失礼と子供心に思ったのか、それを口に入れた。しかし、大の苦手だったので飲み込むことはできない。唾液がどんどん出てきて口いっぱいになり、往生した。最終的にどうしたか、記憶がはっきりしない（こっそり吐き出したような気がする）。子供の頃、人参、大根や蕪の煮物は苦手だった。しかし、今では大根の煮物を美味しいと思っている。仙台の親戚の家でホヤを出されたことがあった。始めて食べたのだが、吐き出してしまった（すみません）。それ以来食べていないので、今食べたら、どう感じるだろうか。

このように思い出してみると、食べ物にあまり興味がないものにとって、食べ物の記憶

は自伝的記憶、すなわち、非日常的な特別な事柄の記憶と結びついているようだ。そうではないと、食べ物に関する生々しい記憶が残らないらしい。豚カツ、ハンバーグ、ウナギ、寿司、刺身、天ぷら、ラーメンなど、多くの人が好むものはわたしも好きである。ただ、これらのものを最初に食べた時の記憶はない。何回も食べている間に曖昧になってしまったのだろう。豚カツについては、子供の頃読んでいたマンガに豚カツ屋の店員の話があり、好きなだけ食べられたらどんなにいいだろうと思った。ところが、そのマンガにはオチがあり、店員は油の香りがかぐだけでもう十分となり、豚カツは食べられないのだった。それほど昔でないが、四谷でたまたま入った店の豚カツが美味しかった。甘い脂身が美味しかったのだ。最近、久しぶりに行って見たら店は変わっていた。新しい店にも豚カツがあったので食べた。酷かった。荻窪に豚カツが美味しい店があるようだが、近所なのにまだ行っていない。こういうところがわたしのダメなところだろう。豚カツは洋食の一種だろう。一般に日本人は味にうるさいので、洋食は世界で通用するように思う。豚カツが出てきたので、ついでにカツ丼の話しを。40年くらい前に一度行った鶴沼海岸の駅前の店で食べたカツ丼が美味しかった。グリーンピースが上に乗っているようなやつである。あの味を再び、ということではいろいろな店で食べたが、まだあの時のカツ丼の味に出会っていない。あの時の味は錯覚のようなものだったのだろうか。ところで、カツカレーはどうもいただけない。やはり、別々に食べた方がいい。結婚する前に妻と上野動物園に行った。大分寒くなった頃だった。カバがフンを散らすのを見たり、ヒグマの大きさに驚いたりしていたが、そろそろ夕食ということで、御徒町の「ち〇き」といううなぎ屋さんに入った。うなぎ丼を食べたが、これが美味しかった。空腹で身体が冷えたところに温かいうなぎ丼は最高だった。数十年後にその店を探してうなぎ丼を食べてみたが、昔の味を経験することはできなかった。食べた時のこちらの条件が違いすぎたのだろう。

このように思い出してみると、やはり、自伝的記憶との結びつきが強いようだ。豚カツでも、刺身でも、天ぷらでも、美味しいものからそうでもないものまで、味はいろいろあるはずだ。ところが、食べ物に興味が薄いわたしは、天ぷらなら個々の天ぷらではなく、カテゴリとしての天ぷらを食べているようなのだ。生き生きとした個別的な記憶でなく、習慣化したエピソード記憶→意味記憶しか残らないらしい（この辺りは、このホームページの『脳と心：認知神経科学入門』をお読みください）。このような怠惰なお客をいいことに、テキトーに商売している店もあるのだろう。

さて、話を戻して、その後、愛知県犬山市にある京都大学の霊長類研究所に就職した。まだ、結婚前だった。当時、研究所には食堂があったので、月曜から土曜日の昼と夜はそこで食べた。研究所は町から少し離れた丘の上にあった。食事のためにわざわざ町に行く気は起らず、持ち前のこだわりのなさで、何でも口に入れていた。一度だけ、味が濃すぎて食べられなかったことがあったが。月曜の昼は決まってカレーだったように思う。同僚

の T.A.氏がロシア民謡?の替え歌で「月曜日はカレーを食べて・・・」と歌っていた。ここで話は脱線するが、赴任して間もない頃、食堂のテーブルの向いで昼食をとっていた K.M.先生が、箸を持ったまま、突然歌い出した。わたしは内心びっくりし、これはエライ所に来てしまったと思った。その後、共同利用研究員の A.K.君が「外では変人でも、霊長研に来ると凡人になる」と言っていた。わたしは自分にはヘンなところがあると思っており、内心気にしていたので、安心した面もあった。さて、話を戻して、朝食はどうしていたか、記憶がない。多分、パンでも食べていたのだろう。先ず購入した台所用品は栓抜きと鍋一つだった。栓抜きは無論ビール用(缶ビールは一般的でなかった)、鍋は無論インスタント・ラーメン用だった。こんな有様なので、日曜日は外食だったのだろう。名古屋や岐阜に足を伸ばしたこともある。岐阜の街をテキトーに歩いていたら有名な繁華街の柳ヶ瀬に出た。何だか、一人侘びしく夕食をとった記憶がある。

犬山では名古屋地方の食文化に出会った。名古屋は何と言っても豆みそ文化である。赤だし、味噌煮込みうどん、味噌田楽、味噌カツなど、正しくブラウン文化である。特に、美味しい!と思ったことはないが、自然と豆味噌の味になじんでいった。数十年前だったが、東京のそば屋で味噌煮込みうどんを注文したことがあった。東京風の味噌汁の中うどんが泳いでいた。何だこれは!と内心激怒?した記憶がある(結局、食べてしまうのだが)。名古屋はまた名古屋コーチンなどトリ肉でも有名である。名古屋コーチンは水たきにした時に特に美味しいと思った。トリ肉の料理も豊富なようだ。ササミの表面を炙った?刺身を初めて食べ、美味しいと思った。手羽先で有名な「世界の〇ちゃん」は名古屋が発祥の地だったか(食べたことはないが)。土地は変わってしまうが、宮崎もトリで有名だ。宮崎出身の Y.M.さんがもってきたトリ肉の燻製?が美味しかったことを思い出した。

就職後しばらくして結婚し、不安定な食生活から解放された。その頃の体重が 48 kg, 胴周りが 68 cm。結婚式の貸衣装で適当なものがなかった。結婚式に出席した同僚の S.N.氏は、私が料理を次々にパクついているのを観察していた。結婚後は昼の弁当を作ってもらい、食堂から解放された。最初の 2 年間はずっとサンドウィッチだった様な気がする。パンにはさむものもほとんど変わりがなかった。食べ物に対する関心が薄かったせい、特に不満もなく食べていた。しかし、2 年間も同じものを食べるとさすがに飽きてきた。挟むものをいろいろと変えてもらったし、ご飯もでるようになった。結婚して間もない頃だったが、妻がトリ肉のソテーを作ってくれた。これがとても美味しかった。皮のところが特に美味しい。以来、好きな肉はトリ肉となった。安上がりな舌である。最近、高校の同級生の T.T.君がトリの皮のブツブツしているところが気持ち悪く、トリ肉は苦手と言っていた。皮は一番美味しいように思うのだが...。そんなこともあるのかと意外に思った。

大学の宿舎の部屋の前に小さな花壇と畑を作った。そこでいろいろな花や野菜を育てた。

野菜はキュウリ、(ミニ) トマト、ナス、ピーマン、オクラ、パセリ、モロヘイヤ、コウサイタイなどの菜っ葉類など(ロクな写真がなかったが載せておく)。オクラの花は花としてもきれいだった。中でも収穫した十六ささげをてんぷらにして塩で食べると美味しかった。ただ、味覚に対する疑問も持った。枝豆を収穫して、ゆでて食べた。初めに口に入れた豆は香りがしっかりとあり、とても美味しかった。ところが、食べ進むうちになれてしまい感覚を再現できなくなってしまった。味覚ははかないという感想である。



手前の菜っ葉は花が咲いている。奥の花壇はイチハツ



ミニトマト

研究所は京都大学に属していたので、京都へ行く機会が増えた。大学院入試の委員として京都に出張した。お昼に弁当が出たが、入っていた出し巻きがとても美味しかった。弁当の内容や外見からとくに有名な店のものとは思えなかったが、美味しかった。研究所長会議などで、多分レベルの高い店に行ったかもしれないが、特に記憶に残っていない。鱧（ハモ）を梅肉で食べたが、特に美味しいとは思わなかった。季節のものなのだろうか。所長会議ということで、緊張していたのかもしれない。上でうな井の話をしたが、多分京都で食べたう巻きも美味しかった。食事は京大の生協食堂で済ますことが多かった。食堂では教員も学生も外国人研究者も議論しながら一緒に食事をしていて、出身の早稲田大学ではそのような光景を見たことはなかったので、うらやましく思った。慶應義塾大学では「○食」という食堂で、教員と学生と一緒に食事をしており、京大と違わないなと思った。そのうち、京大近くに「と○ら」という魚が美味しい店を教えてもらい、そちらをしばしば利用するようになった（確かに美味しかった）。京都のお土産は大抵「阿闍梨餅」だった。もちもちとした皮が独特の食感だった（無論、中にはあんこが入っている）。研究所には関西地方の人が多かったが、わたしのように関東出身者も結構いた。教室の忘年会は、コンロを二つ用意して、関西風と関東風のスキヤキ合戦だった。両方とも美味しかった、というか、楽しかった。

外国へ行ったり、住んだりしたが、食べ物に関してはあまり記憶に残るものがない。やはり緊張しているからか。しかし、パリへ行った時に宿の朝食に出たクロワッサンは美味しかった。列車でドイツからスイスを通りイタリアに入った（線路わきには雑草が生い茂っており、ドイツ、スイスと随分と違う印象だった）。茄子などがあり、イタリアの食材は日本のそれと似ているように思った。イタリアの食べ物には何となく親しみがある。ただ、パルマで食べた生ハムの塩からさには驚いた。アメリカのワシントン DC の郊外に 2 年間住んだが、ショッピング街が近所にあり、便利だった。日本食の材料を手に入れるのにもあまり苦労しなかった。したがって、日本と同じような食事をしており、アメリカの食文化になじむことはなかった（それにしても、アチラの飲み物のボトルなど容器は大きい）。少し勇気を出して？アーティチョークという野菜を買ったものの、どう食べるのか分らなかった。渡米当初、住むところが決まるまで、あるお宅にお世話になったが、食事にだされた平たい肉に楕円の切り口の大きな骨が埋まっていたのには驚いた。ナイフで切ろうとしたが、切れるはずがない。日本と同じように、勤務先の NIH の昼食にはサンドイッチを持っていった。サンドイッチにアメリカ人がよく食べるピーナッツバターをつけたが、口の中にへばりつくようで食べにくく、美味しくなかった。食べやすさも美味しく食べる重要な要素だ（ハンバーガーなど、食べにくいので、あまり好まない）。NIH の同僚たちは何人かで、細長いパンにハムなどの具を挟んだサンドイッチを形から「サブマリン」と言って共同購入していたのを覚えている。

甘いものは好きだ。子供の頃、お汁粉がご馳走だったことは書いた。甘ければ、美味しかったのだ。そのせいか、あんこは好きである。朝食はパンだが、甘いジャムやあんこをつけて食べることが多い（年老いた父親は昔パンにジャムをつけて食べた思い出を繰り返し話した。余程美味しかったのだろう）。大福やどらやき、おはぎなどは好物だ（「阿闍梨餅」！）。「く〇や」の最中はとても美味しいと思った。和菓子はあんこを使うことが多いので、どれも好きである。比較的最近、子供の頃に食べた「シベリヤ」という菓子をみつけた。カステラと水ようかん？を層のように重ねたお菓子だ。カステラと言え、底の部分が香ばしく、粗目の砂糖がジャリジャリして美味しかった。昔、三色菓子パンというものがあった（今もあるかもしれない）。上から見ると、「品」の字のようになっていた。それぞれ中にはイチゴジャム、あんこ、クリームが入っていたと記憶している。一つずつ切り離して、中に何が入っているかを当てながら食べるのが楽しかった。

洋菓子も好きだ。一時、デパ地下のケーキ屋さんでアレコレ買って楽しんだ。日本の店、外国の店といろいろ食べたが、ベルギーの洋菓子店だったか、「ヴィ〇〇ール」のマンゴームースはちょっと複雑な味がして一本調子ではなく、とても美味しいと思った。この店のケーキの中でも最も安い部類なのうれしい。ビスケットやクッキーでは水気が多いものが好ましいように思う。中には唾液の分泌が追いつかないものがあるから。また、チョコレートとオレンジは相性がいいように思った。そういうチョコレート菓子があると聞き、わが舌もそれほど悪くないと思ったりした。ところで、知らないだけかもしれないが、中国や韓国には日本のようにたくさんの種類のお菓子がないような気がする。日本でお菓子が発達したのは、茶道の影響だろうか。ついでに、果物はどれも好きだ。甘味と酸味は多くの果物に含まれているが、酸味がない柿やバナナも好きだ。

甘党のようだが、お酒も好きである。大学生の頃は飲む機会が多かったが、自分が意外とアルコールに強いことが分かった。何かと理由をつけて飲んでいたように思う。わたしはお酒が入ると、にぎやかになるタイプである。大学のそばの飲み屋で樽酒を飲んだが、木の香りがして美味しかった。家では父母の晩酌のお相手をしていた。正月など、お客があるとわたしがお燗番をした。無論、お燗の状態を確かめるために？わたしもしっかりといただいたが。霊長類研究所でもしばしば酒を飲んだ。若い人たちとにぎやかに飲むのは楽しかった。結婚後は、家では週1回土曜日に飲むだけだった。当初は夕飯にアルコールがないとさびしかったが、そのうちに馴れた。今は週1回、それも軽く飲む程度である。妻の「監視」が厳しいからかもしれない。ビール、ワイン、ウイスキー、焼酎、日本酒。どれも美味しくいただいた。どれがもっとも好きかと訊かれたら、冷の日本酒ということになるだろうか。ただ、若い頃のように無闇に飲むことはなくなった。パーティなどでは、後に残らないように、ウイスキーの水割りにすることが増えた。

飲み物ついでに、紅茶、コーヒーの話しを。若い頃は紅茶が主で、コーヒーは飲んでいなかった（インスタント・コーヒーは別な飲み物である）。紅茶ではアール・グレイが好き

だった。ただ、紅茶は飲んだ後に吐き気がすることもあり、多く飲むことはなかった。霊長類研究所で、K.F.君からコーヒーを飲むことを教わった。次第に毎日一杯は飲むように、
というか、飲まないと気が済まないようになった。ブラックで飲む。苦みの強いのはあまり好まない。むしろ酸味の強いキリマンジャロのようなコーヒーが好きだ。現在、昼食後に欠かさず飲んでいる。なお、発泡性のコーラの類はあまり好まない。

ロクな記憶しかないが、これで終わりにする。食べ物にうるさい人は軽蔑あるいは怒り？
すら覚える記述があるかもしれないが、ご容赦を。